

尾花成春・その人と作品

萩原房男

尾花成春の個展と久々に接した。

会場は異様なまでの、尾花の体臭が立ちこめる独特な秘境を形成する。観るたびに、この画家の、一点を凝視したすさまじいばかりの気迫に圧倒される。すでに二十年近くもこのテーマを遂って倦むことなく、只管に精進し続ける尾花を観ていると、私はフト、三木清の”人生は未知への漂白である”と観じたその理念を、さ乍ら地で行くような尾花のそれとがオーバーラップしてくるのである。

三年余の空白をおいた今回、先ず私を射たものは、尾花に内在する視座の微妙に揺れ動く様相であった。まさに、”筑後川畔”に佇つ尾花の苦境に、漸く何モノかが蠢動し始めた気配をそこに発見したということであろうか。それは恐々としながら、潜かに熟成しつつある鼓動の響きにも似た、いかにも尾花の未来への前触れをみたような想いがある。たしかに、画質の変貌の萌しがそこにあった。

迷妄の林を彷徨する”美の哲学”探しの輩とは、極めと明瞭な一線を劃した面壁参禅にも似た尾花の「悟り」への道程を想わせる頼母しい意志の鼓動が響く。

具象の極限が、対象のイメージを払拭することなく、断続する想念を再構築するその熟度にあるとすれば、尾花は迷うことなく、じつくりとその土台を据える作業に没入している。

文学的手法の独白に、ややもすれば逃避しがちな観念的美意識を否定するかのように、美の本質へ迫ろうとする彼、すなわち、コンストラクションの正鵠なる把握に苦悶し続ける非妥協的な画家、尾花成春に私は惜しめない拍手を送りたい。画商たちの好みには合わない絵だと苦笑してみやるが、彼の内なる誇りは、全くその表情とは逆を向いて突立っていると私は視た。尾花の、本格派を志向する熱い視線と、そしてその夢と汗が混然となって画業の未来を睨めている彼の心の風景を密かに垣間みた思いがする。

亀井勝一郎が「岸田劉生」の画業の一端を語るところがある。

二十四、五才にかけて、道路や崖や切り通しがしきりに描かれる。晩年の”大連風景”もそうだが、彼の描いた風景面で、道路の土の見えないものは一つもない
<中略>

切り通しの写生<一九一五年>が有名だが、これは土の生命解剖学とも呼んで

よかろう。自然の意志の、それとは見えない一番土台のもの「土」に執着し、まるで自然の皮膚のシワを描くように、細密描写を行なっている。生々とした肉体を持った”土の肖像画”だ。写実主義という言葉で片づけられたり、或る点では凡庸いさえ見える絵だが、眺めていると神聖なものが感ぜられる。

左方に描かれた強い曲線をもった石垣と石塀が「土」の实在を強調し、その肌を輝かせる。そして背景は深い青空である。

”麗子像”で創造したあの無垢なるものにそれは通じると言ってもよかろう。

「土」の純粹生命が表現されたのである。

文学界の巨匠、亀井勝一郎が、不世出の英才、岸田劉生の画業へ注いだ鋭い視覚は、その奥深くに煌めく美の土台となった実体を、われわれの前に掴み出して、改めて、表現の伏線となる肉体の在り方を指し示してみせたことであった。

尾花の、一連の”筑後川畔”のテーマにの底に潜むものも、ただ躍る草むらの変幻万化の姿体を徒らに迫っているものでないことを、今回店は見事に印象づけた。亀井勝一郎が指摘する美の本質、その深部へのアプローチこそ、漂白の命運を負った尾花の目指さねばならぬ茨刺の遠い道のりなのかも知れない。

尾花成春の人とその芸術に触れるとき、私はもっとも人間的な言葉で語るべきだったと偲う。いつ会っても、新鮮な感動に上気しているような、そんな彼の若々しさに接していると、こちらまで清涼な気分になって仕舞う。こうした彼に、殊更に難解な美辞や麗句で、彼の画業の今日的段階をいちいち賞揚する気早な愚は控えたい。

彼の芸術の基調はどこまでも正統派に属する。今さら、虚妄の幻想を再び呼び戻す無駄もすでになくなった。信じた今日の画業の究極に繋がる一点だけをしっかりと見すえて、粘り強く、しかも堂々と取組んで行ってもらいたい。あの亀井勝一郎が言うところの「土」なる実相への開眼である。それは如何に表現のすべてを支えるバックボーンの役割を演じていることか、”筑後川畔”の眼を奪うばかりの草原の多様な動きより、むしろ私はそれを根づかせる大地の生命感の掘起氏こそ、尾花芸術がいつかは観せてくれる真骨頂の開花につらなる仕事ではなかろうかと考える。

近頃、真執な求道の旅に漂泊する画家の典型を私は彼の中に視る。これからも屹度、芸術の本質がそうであるように無限のロマンとそのための求道の旅が涯しなく続くことであろう。

私はそうした「尾花成春」の後姿を、じっと何時までも瞳めていきたい。